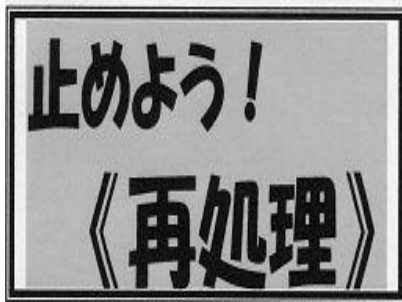


三陸の海を放射能から守る
岩手の会 (略称) **三陸の海・岩手の会**
 郵便振替 02240-5-102650
 ホームページ [再処理/岩手の環境](#)
[/RI 廃棄物 \(coocan.jp\)](#)
 本紙は市民カンパで発行しています。
 購読したい方は事務局に連絡下さい



《天恵の海》
 2024(令和 6年)
 8月 11日
 第259号
 編集事務局 S.Oshida
 TEL・FAX 019-623-1636

7.7 女川原発反対 集会&デモ

550人が結集

再稼働を許すな!

避難できない! 人権無視だ!

津波後初の女川町内デモ



集会決議(要約)
 能登半島地震を自然からの最後の警告として女川原発をストップさせ、原発ゼロ社会を切り開こう
 □女川原発は福島事故原発と同じ老朽・被災原発であり再稼働は、とんでもないことです
 □女川原発立地自治体には「地元同意」を取り消すよう求め、原子力規制委員会には新知見による耐震安全性の再審査を要求します
 □宮城県には専門家による安全性検討委員会を再度設置するよう求めます
 □県や関係自治体に、原発災害を含めた複合災害時の避難計画の抜本的見直しを要求します
 □女川をなし崩しに「核のゴミ」捨て場にしないこと。

二六年ぶりの町内デモ
 女川は快晴の夏日。三度の暑さの中、津波から復興途上の女川町内を約五五〇人が「危険な原発は止めよう!と叫びながら行進しま

した。宮城市民の機関誌「鳴り砂」には、二六年前の一九九八年六月二八日、女川原発差し止め控訴審の結審の日に高木仁三郎さんの「もはやお荷物で

しかない原発」との講演の後、八五人で女川町内をデモ行進したとあります。八五人から五五〇人へ、原発ゼロの日は未だ厳しい現実にある。しかし前進を続けよう。

七月七日、東北電力が公表した本年九月の女川原発再稼働を阻止するため、市民による集会とデモが地元女川町で開催されました。宮城県下はもとより東北、北海道、東京、京都、さらに韓国からも、五五〇人が参加と発表されました。女川町生涯活動センターは満席となり、別途サテライト会場が設けられました。ジャーナリスト青木美希さんの「原発ゼロで生きる方法」のテーマの講演の後、実行委員会の提案した集会決議案を満場の拍手で採択しました。集会のあとの町内パレード(デモ)では、女川原発再稼働を許さないの声が響き渡りました。

冷却水ポンプも二台のうち一台が水没しました。駐車場のクルマは無事でしたが、牡鹿半島の道路は寸断され、被災者は各地に分断。彼も女川を出られず救援と捜索活動に従事しました。その頃、福島県双葉町の家族は原発の放射能から逃れ所在不明、やっと茨城県古河市の親戚に逃れている事が判明。事故から四日目の夕刻、「JR古河駅で妻と息子に再会した時の事が忘れられない」と語りました。

3・11時、牡鹿半島の道路は寸断された
今野さんのビデオレター



今野寿美雄さん

青木美希さんが被災者ルポで知り合った原発労働者の今野寿美雄さんのビデオレターが上映されました。
 彼は3・11の時、女川原発構内で激しい揺れを体験し作業員事務所から町並みに押し寄せてくる大津波を目撃しました。原発敷地まであと80センチ。重油タンクが横転し、

「能登」と「女川」は「福島原発事故」に連なる

地震大国日本の「新規制基準」は、もっともっと厳しくせよ！

東北電力は再稼働を撤回し、立ち止まって考えよ！

被曝は身近なもの

青木美希講師は、福島事故当日の避難所での取材から話し始めました。乳飲み子を抱えた女性性は「水道水に放射性ヨウ素検出」のニュースに悩みました。半減期8日とはいえ水道水を飲めば母乳からのヨウ素が乳児



講師

ジャーナリスト・作家
青木美希さん

に悪影響を与える。しかし水道水しかない。その子は小学生になつての甲状腺検査で「要観察」の結果が出たと言います。

広大な帰還困難地区と数万人の未帰還者

福島事故避難民は未だ数万人と言われ、政府や自治体からの支援も打ち切られ苦しい生活を余儀なくされています。「帰還困難地区」とは、この数万人が帰れなくなった土地のことです。

原発事故避難の困難 能登半島地震のリアル

青木さんは志賀原発周辺の避難の実態についても足を運んで調査しました。寸断された道路や隆起した港の現実。自治体を回った時の問答です。

「原発が危険になり、家が倒壊しそうになったらどうしますか？」担当者「鉄筋コンクリートの防災センターに避難して下さい」と。しかし住民数の7分の1のみの定員。これでは、放射能対策になっていない。深刻な規模の原発事故は起きないと思っっているのだろうか？ それは新たな「原発安全神話」です。

原子力規制委員会待

住民避難と関せず

青木さんは山中伸介原子力規制委員長が能登地震を受けて以下のように発言したことを紹介しました。

一月十日

NHKテレビニュース

「屋内退避が出来ないような状況が発生したのは事実だ。その点の知見を、きちんと整理した上で、もし、災害対策指針を見直す必要があるれば、見直してゆきたい。」

一月十二日

東日本放送ニュース

山中委員長女川訪問。宮城県村井知事は、能登地震を踏まえ避難方法の検証を要望しました。山中委員長は「能登半島地震で得られた知見をもとに、防災指針の見直しを進めたい。」

二月十四日

原子力規制委員会 記者会見(会見録)

「避難も出来ない、屋内退避も出来ないということは、今後の検討の中で考えない。」

青木さんは、原子力委員長が発言の能登地震直後と二月の記者会見のギャップに注目すべきとし、日本の原子力推進の側の強固な意図がここに現れているとしました。

青木さんの講演への所感

会場で、私は青木さんの最新著書『なぜ日本は原発をとめられないのか？』(文春新書二〇二三、十一月刊)を購入しました。彼女は「希望を」とサインしました。この本のキヤッチは「安全神話に加えてマヌケの大罪」。

彼女は新聞記者として「エネルギーの研究者ら百人。被災者を含めると数百人」を取材したと書いています。今回の講演はこの新著に続く能登地震と原発再稼働についての最新情報です。

原子力規制委員長の驚くべき発言

私達は3・11福島第一原発事故の原因が、紙一重で事故には至らなかった女川原発と共通する事を学びました。さらに本年の能登半島地震では、実際に「モニタリングが機能せず志賀原発放射能状況不明、避難路途絶、屋内避難も出来ない状況」を目撃しました。

ところが山中伸介原子力規制委員長の発言は「避難指針について今後の検討の中で考えない」です。山中委員長の第一任務は原発災害から国民の命と財

産を守ることははずです。シヨアハム原発廃炉

住民運動の実例

私達の会では、「アメリカで、住民運動により原発が廃炉された実例」があると、話題になりました。早速ネットで検索し、その原発は、ニューヨーク州のシヨアハム原発である事を知りました。

この原発は一九七三年から一九八四年の間にロングアイランド電灯会社によって建設され米原子力規制委員会(NRC)によって運転許可が降りていました。しかし稼働を前に住民から「真に機能する避難計画」の要求が出され、NRCへの異議申し立てや、州議会とニューヨーク州知事に訴えました。一万五〇〇〇人のデモがなされ、結局この原発はただの一度も稼働することなく一九八九年に廃炉となりました。住民の「原発避難の権利」が擁護されたのです。

国政選挙に近い。日本国民もこの廃炉の実例に学ぶべきです。(尚)

(●考資料)シヨアハム

原子力発電所

(wikipedia.net)